福岡市埋蔵文化財調査報告書第957集

比 恵 48

── 比恵遺跡群第101次調査報告 ──

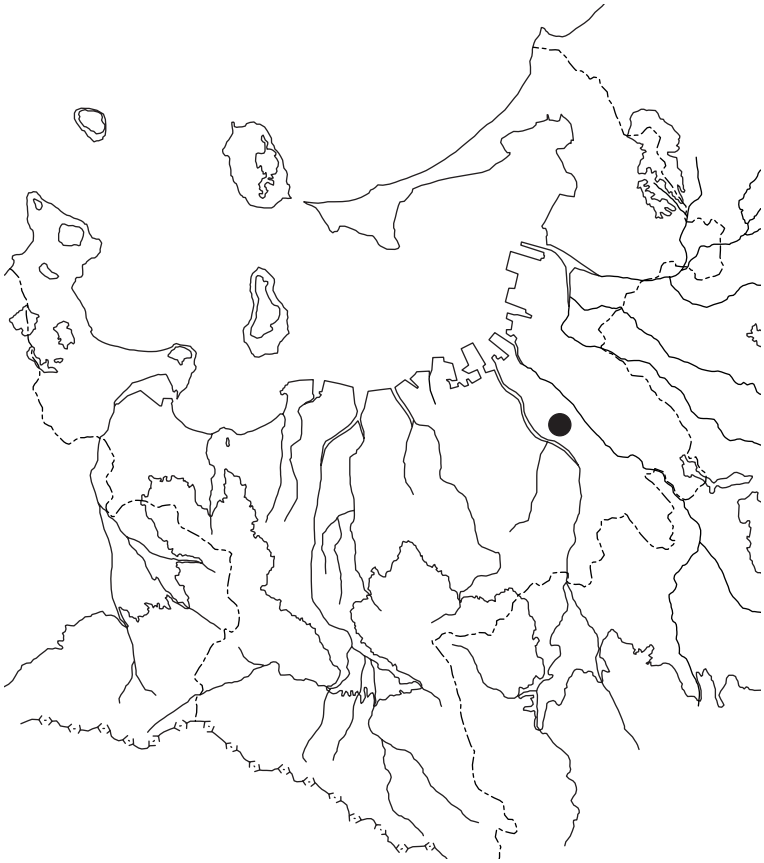
2007

福岡市教育委員会

比 恵 48

── 比恵遺跡群第101次調査報告 ──

福岡市埋蔵文化財調査報告書第957集



遺跡調査番号	0526		遺跡略号	HIE-101	
地　　番	博多区博多駅南五丁目107他		分布地図番号	東光寺 37	
開発面積	176.62m²	調査対象面積	119.9m²	調査面積	119.9m²
調査期間	平成17年 6 月 14 日～ 7 月 16 日				

2 0 0 7

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との玄関口として発展し、市内には豊かな自然と多くの遺跡が残されています。これらは私たちの暮らしに潤いを与え、豊かな生活環境を作り出しています。私たちはこれらの遺跡を後世に伝えていくことを願い、さまざまな形で遺跡の保護・活用に取り組んでいます。

その一方で、最近の都市の発展により新しい開発事業が数多く手がけられ、そのために重要な遺跡が破壊され、失われつつあるという厳しい現実があります。本市ではこれらの遺跡については事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努めています。

本書は博多区博多駅南五丁目地内における比恵遺跡群第101次調査の成果を報告するものです。この調査により、弥生時代前期の貯蔵穴群や弥生時代後期の井戸などの当時の集落に関わる遺構を確認することができ、この地域での新たな資料を得ることができました。

本書が文化財保護への理解と協力を得られる一助と成るとともに、学術研究の資料としてご活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くのご協力を頂いた、沖秀人様をはじめ関係者の方々に対し、心より謝意を表します。

平成19年３月30日

福岡市教育委員会
教 育 長　植　木　とみ子

例　　言

１．本書は共同住宅建設に先立って福岡市教育委員会が平成17年６月14日から平成17年７月16日にかけて行った比恵遺跡群第101次調査の調査報告書である。
２．本書に掲載した遺構・遺物実測図の作成、写真撮影、挿図の整図は大塚紀宜が行った。なお、Fig.21は吉留秀敏の作図・整図による。
３．本書に掲載した座標は世界測地系を使用している。また本書の挿図内で用いた方位は磁北で、真北から6°21′西偏する。
４．本書で使用した遺構の呼称は、井戸をSE、土坑・貯蔵穴をSK、柱穴・ピットをSPと略号化している。
５．遺構・遺物番号は基本的に各々通し番号で、重複はない。
６．本書に関わる記録・遺物などの資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
７．本書の執筆・編集は大塚が行った。石器に関する報告については、吉留秀敏（埋蔵文化財第１課）が執筆した。

目　　次

第１章　はじめに……1
　１．調査に至る経緯……1
　２．発掘調査の組織……1
第２章　遺跡周辺の歴史的環境……2
　１．自然環境と遺跡立地……2
　２．比恵遺跡群における弥生時代前期の様相……2
第３章　調査の概要……5
　１．貯蔵穴……5
　２．井戸　……15
　３．その他の出土遺物　……17
第４章　小結　……18

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

2005年（平成17年）3月31日付けで、沖秀人氏より福岡市博多区博多駅南5丁目106－1、107地内における共同住宅建設にともなう埋蔵文化財の有無についての照会が申請された。これをうけて埋蔵文化財課（当時）では、申請地が周知の遺跡である博多遺跡群の範囲内に位置することから、埋蔵文化財課では関係者と協議を重ねた結果、建物の建築予定部分については建物基礎が遺構面に影響を与えることから、申請地全体について発掘調査による記録保存を図ることとし、平成17年6月から7月にかけて発掘調査を実施した。

調査は既存の建物が解体された後、表土を除去して遺構面を検出し、遺構を掘削する手順で進められる予定であったが、廃土置き場を確保する必要上、まず調査範囲の西側半分を先行して表土を除去し、遺構面を検出して遺構を掘削し、記録をとったあとで廃土を反転して東側部分の調査を行う段取りで進めることとなった。調査は6月14日より重機による西側調査区の表土除去から開始し、作業員による遺構検出遺構掘削を行い、7月16日に調査を終了した。

発掘調査の実施にあたっては、地権者の沖秀人氏をはじめ関係者の方々に多大なご理解とご協力を頂きました。とくに沖氏には調査中何度も現場に足を運んでいただき、周囲の以前の状況などについて多くの有益なご教示を頂きました。ここに記して感謝いたします。

２．発掘調査の組織

事業主体　沖秀人
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　埋蔵文化財課（現埋蔵文化財第１課）　課長　山口譲治
庶務担当　文化財整備課（現文化財管理課）　鈴木由喜
事前審査　埋蔵文化財課（現埋蔵文化財第１課）事前審査係　本田浩二郎
調査担当　埋蔵文化財課（当時）　大塚紀宜
調査作業　石川洋子　伊藤美伸　乾俊夫　桑原美津子　柴田博　田中トミ子　濱地静子　林厚子
　　播磨千恵子　吹春憲治　北條こず江　水野由美子
整理作業　篠原明美　古城恭子

第２章　遺跡周辺の歴史的環境

１．自然環境と遺跡立地

比恵遺跡群は、東側を御笠川で、西側は那珂川で区切られた舌状の台地上に位置する遺跡である。台地は南東から北西方向にかけて細長く伸びており、その基部は背振山系の北麓に分布する丘陵の1つである春日丘陵に求められる。この細長い台地上には須玖遺跡群、井尻B遺跡群、那珂遺跡群などが列を成して立地しており、特に那珂遺跡群は比恵遺跡群の南側に隣接していて、遺構の分布状況や自然地形での隔絶がほとんどなく、本来は同一遺跡群を構成していたと考えられる。

台地のうち、比恵・那珂遺跡群が立地する台地北側部部分の地質は、花崗岩風化礫層を基盤層とし、その上層には阿蘇山の噴出物である八女粘土層や鳥栖ローム層が堆積している。この台地の端部は那珂川・御笠川河川敷の沖積平野と地点によっては4～5mの落差がついていて、両者の間には地形的な不連続が生じている。

２．比恵遺跡群における弥生時代前期の様相

比恵・那珂遺跡群自体は旧石器時代から縄文、弥生、古墳、古代、中世の各時代の遺跡を継続的に包含する大規模な重層的遺跡群である。特に弥生時代～古代には、福岡平野の拠点といえる集落遺跡、官衙遺跡が存在している。それぞれの時代によって遺跡の立地や分布には差があり、各時代の遺跡・遺構の性格を表している。

弥生時代前期に焦点を絞って比恵遺跡群内の遺跡立地の動向を見ていくと、台地北東端部の第30・31次調査地点で弥生時代前期後半の貯蔵穴が40基以上検出され、その東側に隣接する第90次調査地点では同時代の住居跡も検出されており、弥生時代前期後半の集落の1つがこの地点に形成されていたことが明らかである。また台地端部から北に下った地点である第24～26次では竪穴住居跡とともに農耕具を中心とした木器が多数出土しており、隣接する28次調査でも前期の遺構が検出されている。台地北東端のこの2ヶ所の地点を同一集落とみるか個別の支群と見るかは今後の周辺の調査結果で検討すべきである。

また、台地西側では、今回の調査地点に近接する第3次・8次調査でも弥生時代前期に属する遺構・遺物が検出されている。3次調査では縄文晩期～板付Ⅰ式の遺物やピットなどの遺構を検出している。8次調査では板付Ⅰ式～板付Ⅱ式期の貯蔵穴を11基検出している。3・8次調査のいずれも既に相当の削平を受けた後での調査であり、竪穴住居を含め、付近に当初存在した遺構のほとんどは失われたと考えるのが適当であろう。

※各調査の参考文献
（3次調査）筑紫野市史学研究会『見捨てられた春住遺跡』1972
（8次調査）『比恵遺跡第8次調査概要』福岡市埋蔵文化財調査報告書第116集　1985
（24～26・28次調査）『比恵遺跡群（10）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集　1991
（30・31次調査）『比恵遺跡群（11）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集　1992
（90次調査）『比恵41－比恵遺跡群第90次調査の概要－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集　2005

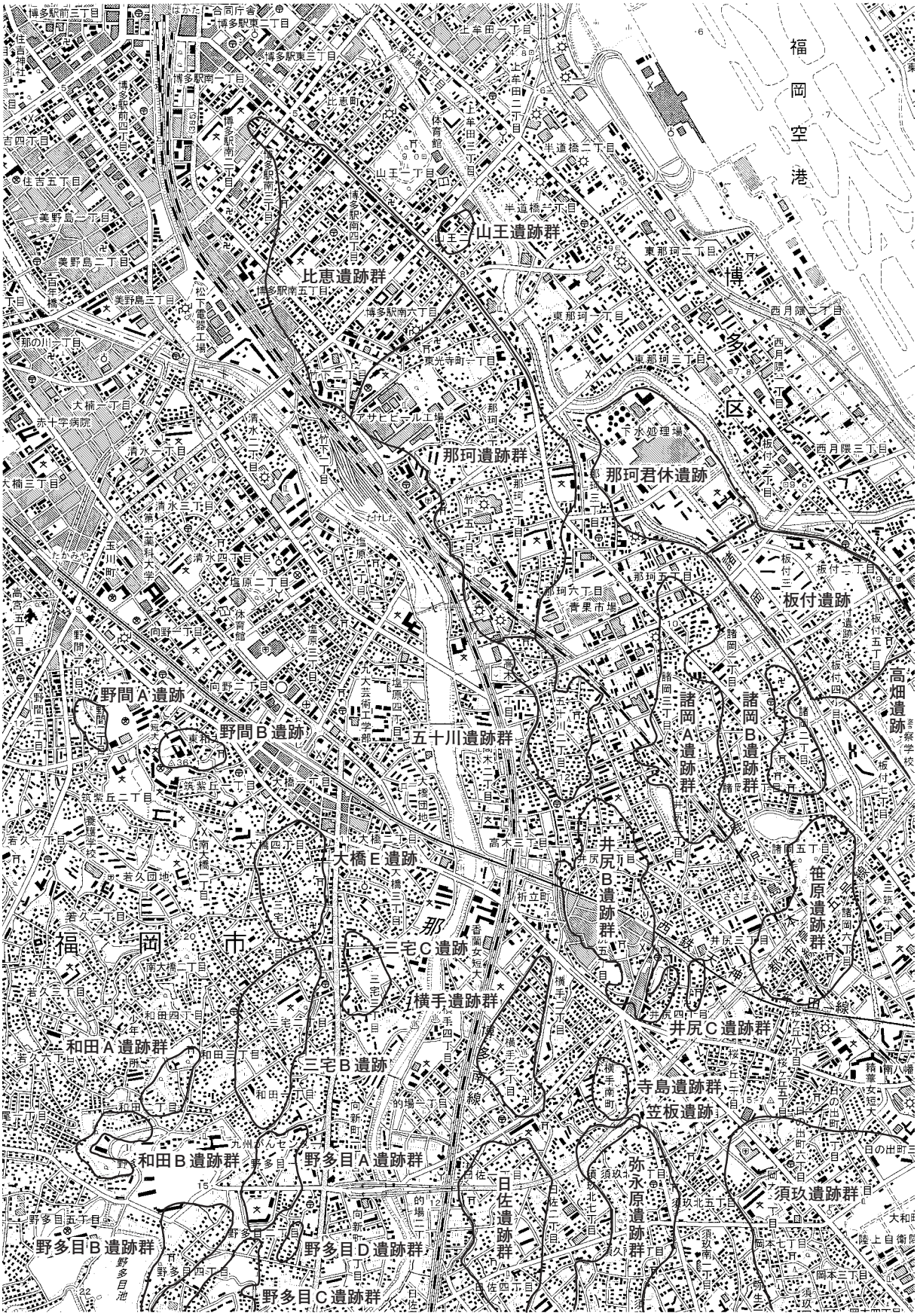


Fig.1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

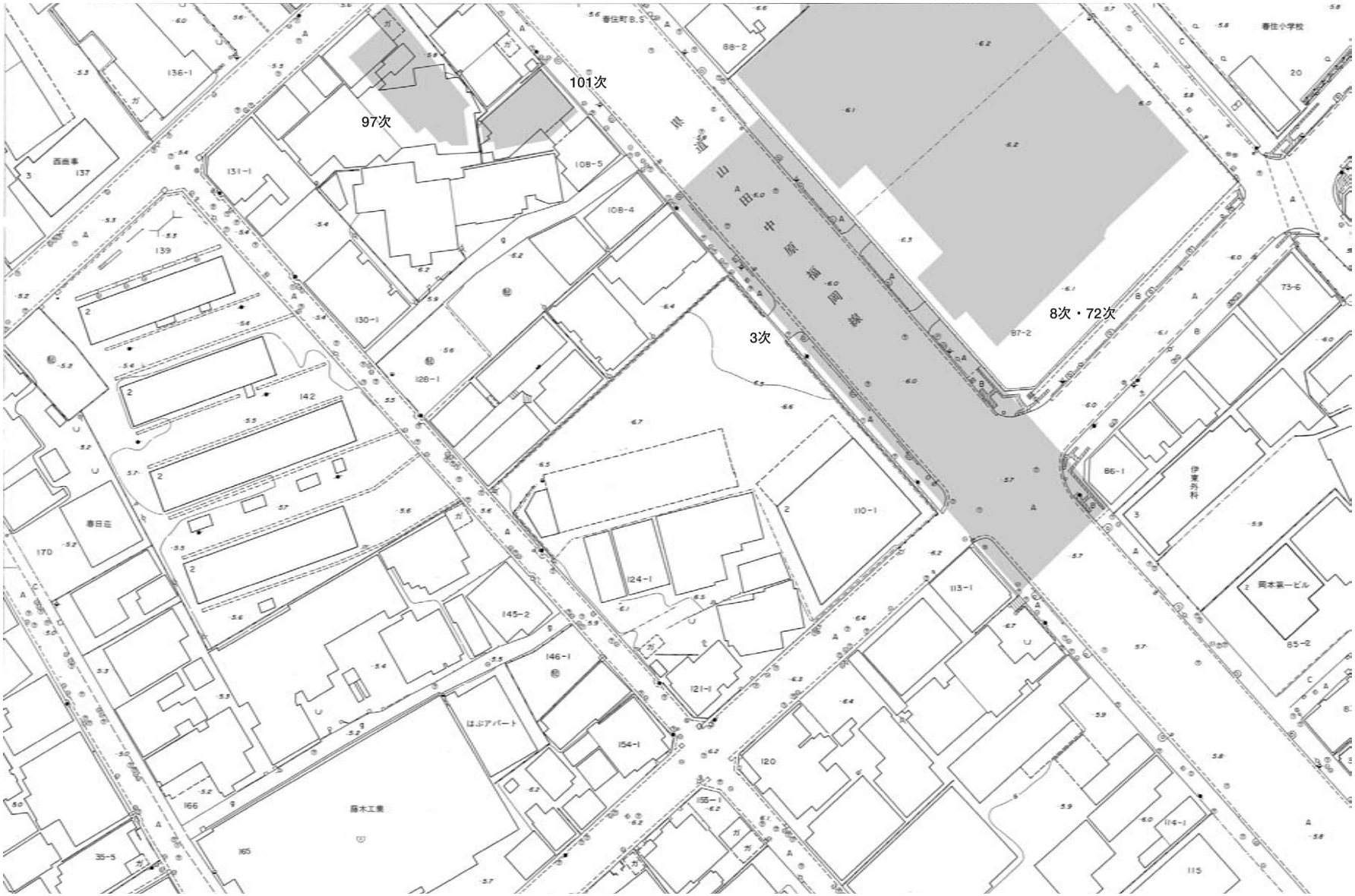


Fig.2　調査地点位置図（1/1,000）

第３章　調査の概要

１．貯蔵穴

SK-02（Fig.4）

調査区南辺側に位置する土坑で、遺構の南側部分は調査区外に及ぶ。調査区内で検出した部分をみると、コーナーが比較的はっきりした四辺形が想定され、SK-04・SK-07とに法量、軸線がほぼ共通する貯蔵穴であると考えられる。遺構主軸線をSK-04、SK-07と平行な南北方向と想定すると、遺構の幅は検出面で1.5m、床面で1.35mを計る。床面はほぼ平坦で、壁面は床からほぼ直立して立ち上がる。遺構北辺中央にテラス状の半円形の掘り込みが見られるが、これは遺構に伴うものではなく、切り合ったピットを同時に掘削してしまった結果と考えられる。

遺構内は黒色粘質土が検出面から床面まで堆積しており、地山土のブロックはほとんど堆積していない。土質がほぼ均質で細かく分層することが難しい状況であることから見て、天井や壁面の大きな崩落がない状態で継続的に遺構内に土砂が流入していったことを示している。

出土遺物（Fig.5）

遺構内から出土した遺物量は少ない。**1**は壺形土器。板付Ⅰ式の壺形土器の胴部中位以上の破片で、口縁周の1/6程度遺存する。頸部との境界に明瞭な屈曲をもち、内面にも粘土の接合痕が明瞭に遺存する。口縁内面と頸部外面の一部に横方向のミガキ痕跡が残るが、風化のため、器壁の大部分は剥落

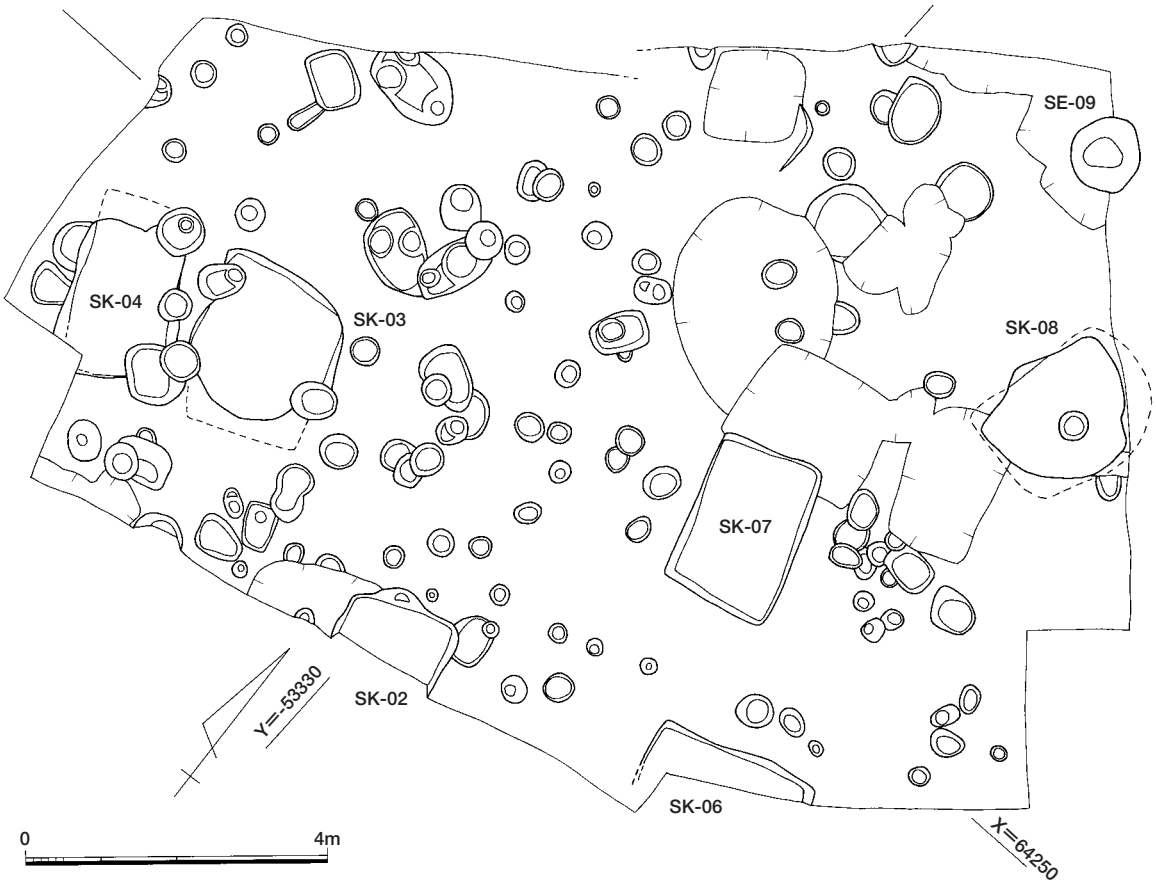
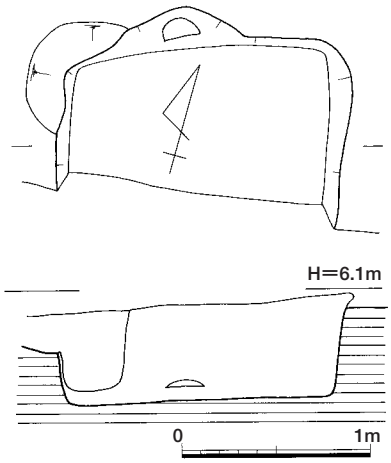


Fig.3　調査区全体図（1/100）



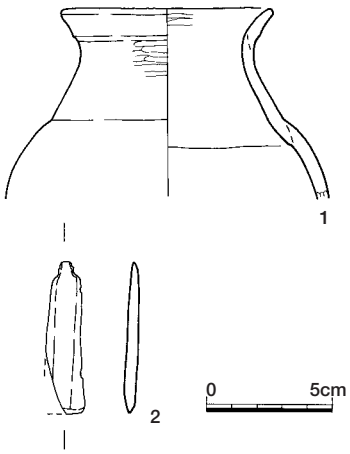


Fig.4　SK-02 遺構実測図（1/40）　Fig.5　SK-02 出土遺物実測図（1/3）

していて調整は不明である。小片で風化が進んでいることから、本来の遺構の時期にともなうものであるかどうか疑わしい。

2は磨製石製品。玄武岩製の石製品で、一部を欠損する板状の形状を呈する。端部の一方はつまみ形に細かく研ぎ出され、もう一方の端部は刃部状に研ぎ出されるが、刃部程の鋭さはない。石錘の一種と考えられるが、特定できない。

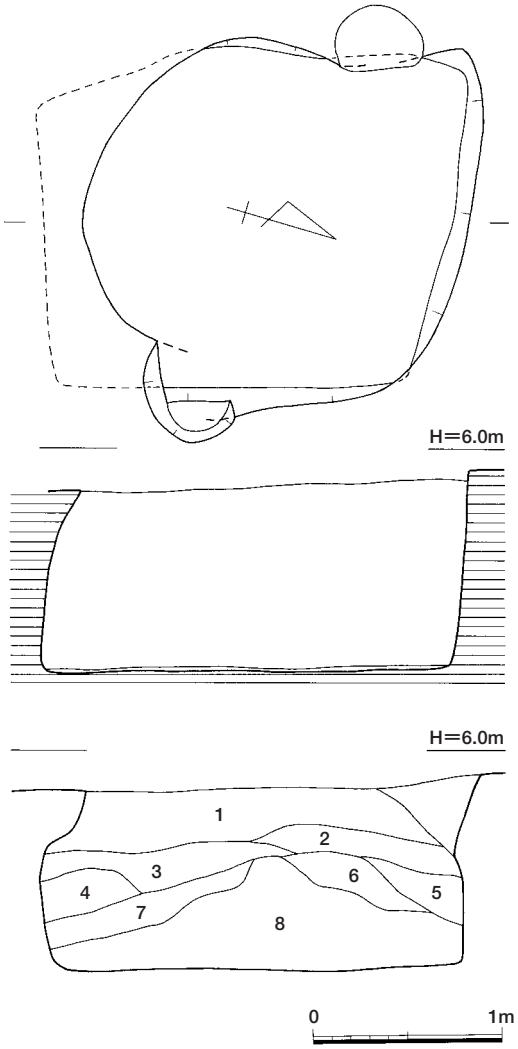


Fig.6　SK-03 遺構実測図（1/40）

1：黒色土　2：黒色土　3：黒色土　4：明褐色土　5：黒色土　6：黒色土
7：黒色土　8：明褐色土

SK-03（Fig.6）

調査区西側部分で検出された土坑である。遺構軸線は南北方向に向き、隣接するSK-04と遺構軸線はほぼ平行する。検出段階では、遺構上端の形状が隅丸方形に近い楕円形を呈していたが、掘削の結果、下端は整った長方形を呈していることが確認された。上端は東辺と西辺の一部がそれぞれ別の柱穴によって切られており、また東辺の一部は不自然な形状になっているが、これは崩落によって本来の形状を留めていないものと考えられる。断面形はフラスコ状を呈していたと考えられる。遺構断面や土層断面にみられるオーバーハングの形状から見て、本来はもっと深かったものが、削平のため現在の形状になったと考えられる。

床面上30cmの高さから土器が2点、横置した状態で出土している。

覆土は上層に黒色土を主体とした層が、下層に明褐色土を主体とした層がみられる。覆土中層は黒色土と明褐色土が交互に堆積しており、土砂流入と遺構壁面の崩落が同時に進んでいたことを示している。

各土器の検出状況から見て、この貯蔵穴は本来土坑中央部に開口していたと考えられる。

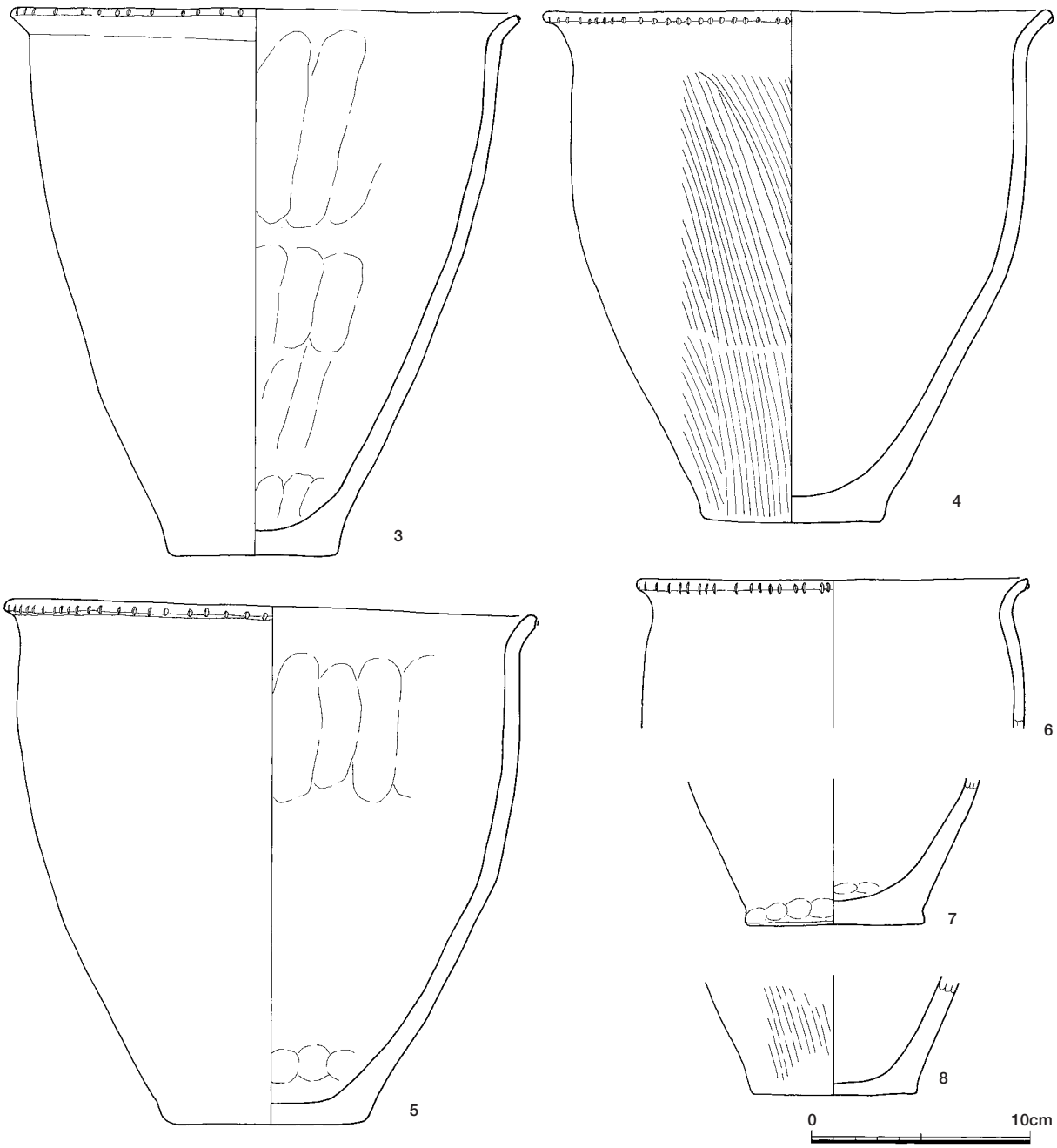


Fig.7　SK-03 出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.7）

図示できた遺物はいずれも甕形土器。**3**～**5**はほぼ完形で出土する。**3**は遺構南側の壁際で出土した甕形土器。胴部外面は大部分の器面が剥落しており、一部ナデ調整の痕跡が残る。内面はナデ調整で、整形時の指圧痕跡が縦方向に残る。

4も遺構南側の壁際で出土した甕形土器。胴部外面は縦方向のハケ目で、目が太く目の間隔が非常に広くて断面も凹線形の貝殻条痕状を呈する。内面は全面ナデ調整。

5は覆土中から出土した破片を接合し、ほぼ全ての破片が揃う。口唇部は横ナデで整えた後で下端に刻目を施す。胴部外面は全面ナデ調整。内面も全面ナデ調整で、胴部上半は整形時の指圧痕が縦方向に残る。風化のため全体に器壁がやや荒れる。

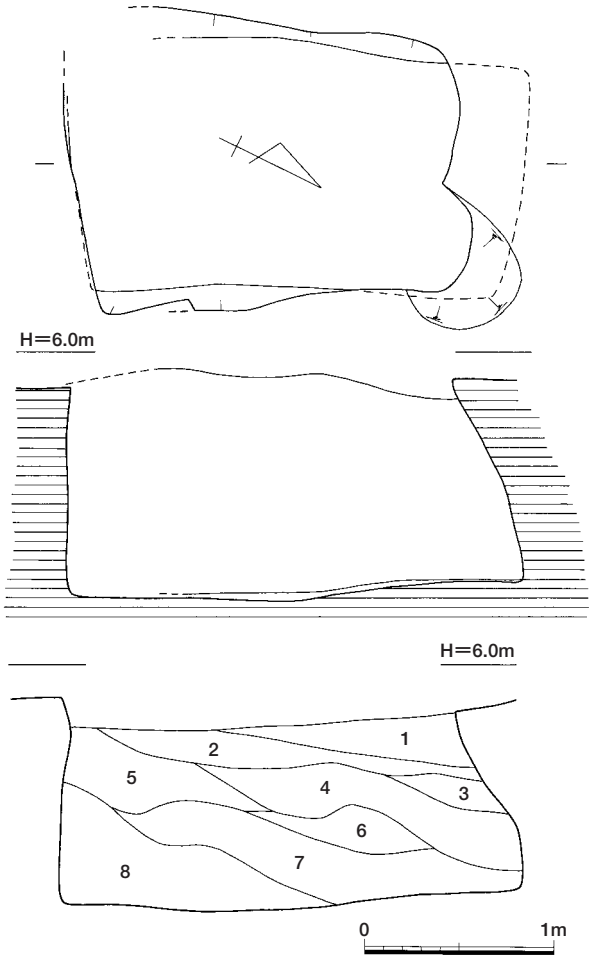


Fig.8　SK-04 遺構実測図（1/40）

1：黒色土　2：黒褐色土　3：黒褐色土　4：暗褐色土　5：暗褐色土　6：暗褐色土
7：暗褐色土　8：暗褐色土

6は甕形土器の胴部上位以上の破片。口唇部は面取りしていて端部下端に幅細の刻目を施す。外面胴部は縦方向のナデ調整。内面は器壁が剥落し、調整は不明である。**7**は甕形土器の底部破片。底部外面は指押さえ整形で指圧痕跡が残り、底部端部は横に小さく張り出す。外面は器壁が剥落し、調整は不明である。**8**は甕形土器の底部破片である。底径7.4cmを計る。底部外面は風化が進み、縦方向ハケ目の痕跡がわずかに残る。内面はナデ調整で仕上げる。底部は平底で、ナデ調整。

SK-04（Fig.8）

調査区西側部分で検出された土坑で、南西側コーナー部分の一部が調査区外に及ぶ。SK-03と隣接し、主軸方向もほぼ共通する。SK-03との間隔は最も狭い箇所で20cm前後しかないため、両者が無関係に築造されたとは考えにくく、わざと切り合わないようにしたと考えざるを得ない。

検出段階での遺構面上での平面形は隅丸四辺形で、北東側と南東側のコーナー部分と西辺の一部を他のピットによって切られており、検出段階では遺構の平面プランがつかみにくい状態であった。遺構下端は長方形を呈し、四隅は明瞭に屈曲する。壁面は、北辺では強くオーバーハングしているが、その他の壁面は南辺がわずかに内側に迫り出す様相であるものの、東西の側壁はほぼ直立し、内側に張り出す様子はみられない。土層断面でも、南側に開口部があることが想定され、南側の壁面は直立していた可能性が高い。

遺構法量は、上端レベルで、長軸方向長2.1m、短軸方向長1.6m、下端レベルで長軸方向長2.4m、単軸方向の幅は北辺側で1.2m、南辺側で1.3mを計る。遺構検出面からの深さは1.1mほどで、断面形状から見てかなり削平されていることが予

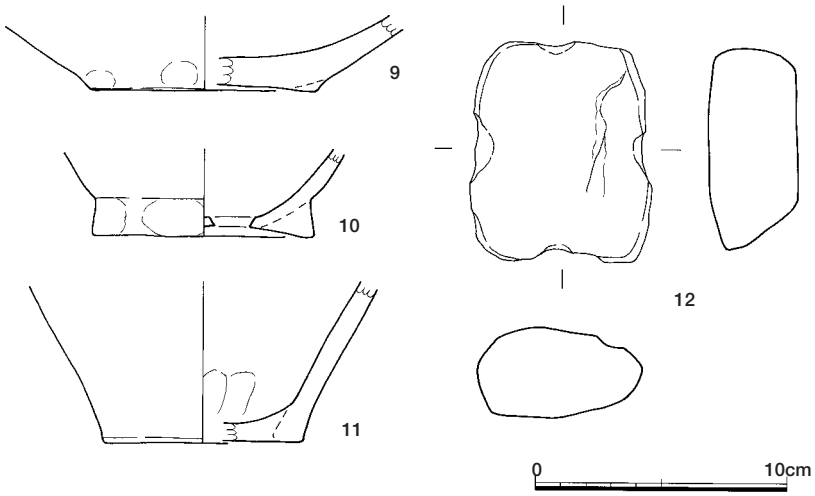


Fig.9　SK-04 出土遺物実測図（1/3）

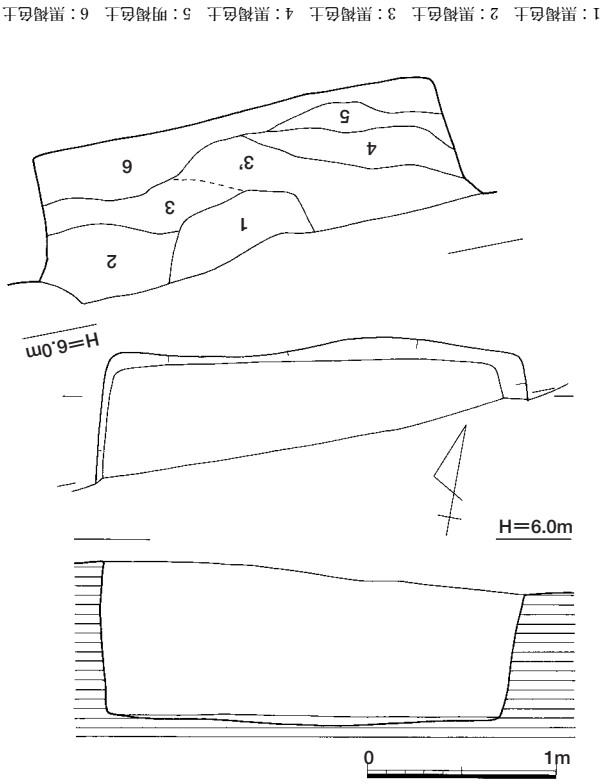


Fig.10　SK-06 遺構実測図（1/40）

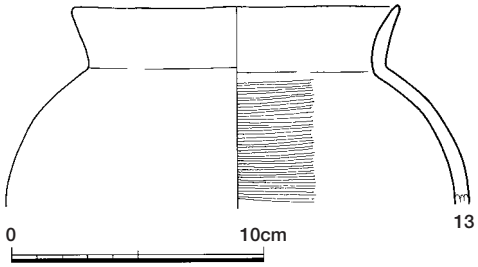


Fig.11　SK-06 出土遺物実測図（1/3）

想される。

遺構覆土はいずれも黒色から暗褐色を呈し、土色や土質に大差ない。おそらく遺構廃棄後、土砂が継続して漸移的に流入し、埋没した結果であるとみられる。地山土の明褐色粘質土の崩落がみられないことから、本来の遺構の形状は検出した段階の形状とほとんど変わらないものとみられる。

出土遺物（Fig.9）

遺物の出土量は比較的少なく、また出土した土器をみても小片が多く、完形に復元できる遺物はない。

9は壺形土器で底部付近の破片。底径9.0cm。底部はやや上げ底気味で、胴部外面はナデで、底部付近に指圧痕が疎らに遺存する。内面はナデ。**10**は壺形土器で、板付Ⅰ式の壺形土器の底部破片と考えられる。底径8.8cm。底部は粘土を貼り付けて円盤形を呈している。底部中央からやや外れた位置に穿孔がある。内外面とも器壁の剥落が著しく、調整が観察できる部分はない。風化の度合いから見て、遺構本来の時期を示すものではないと考えられる。**11**は甕形土器の底部付近の破片。胴部外面の調整はナデで、底部付近に指圧痕が疎らに遺存する。内面はナデで仕上げる。**12**は石錘で砂岩製の石錘。十字形に凹み状の欠けた部分があり、漁労具として使用されたと考えられる。全体に軽く摩耗しているが、使用に伴うものとみられる。

SK-06（Fig.10）

調査区南辺側で検出された土坑で、遺構の南側部分は調査区外に及ぶ。調査区内で検出・確認された範囲では、コーナー部分が明瞭に屈曲する四辺形が想定でき、SK-02・SK-04に形態が類似する土坑と考えられる。遺構の主軸線もSK-02・SK-04に平行しており、特にSK-02とは北側の辺が同一直線上に位置する配置になっている。このため、両者が強いつながりで作られたことが想定される。調査区内で検出した部分でみると上端の幅で2.3m、下端幅2.1mを計り、SK-04の長軸方向の長さと近似するため、SK-06は長軸方向を東西方向にとっているものと推定される。

床面は平坦で中央部がわずかに凹む。床面と壁面との境界は明瞭に屈曲する。壁面は東側壁面が比較的開き気味に広がっているほかは、各壁面ともほとんど直立し、壁面がオーバーハングする状況は見られない。遺構検出面から遺構床面までの深さは深いところで85cmを計る。

土層観察は調査区境界に沿った面で行っているため、主軸に平行な方向ではない。覆土の上層から

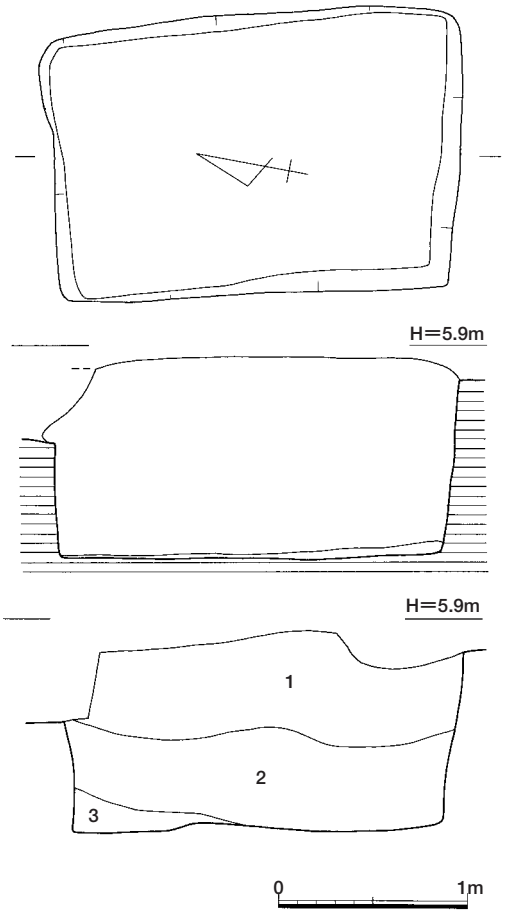


Fig.12　SK-07 遺構実測図（1/40）

1：暗褐色土　2：暗褐色土　3：暗褐色土

SK-07（Fig.12）

調査区東側部分で検出された土坑遺構軸線は南北方向に向き、SK-02・03・04・06とほぼ同一方向に向いている。特にSK-04とはほぼ並列する位置関係と見ることもでき、両者の築造が強く関連している可能性も看取できる。

上端・下端の平面形はいずれも四隅が明瞭な長方形を呈し、各辺も直線的にのびる。壁面は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁面がオーバーハングする様相は見られない。遺構全体の形態は箱形を呈する。

遺構覆土は3層に区分でき、いずれの層も土色や土質に大差ない。いずれも暗褐色の粘質土を主体とし、明褐色土のブロックを多く含み、粘性が高く硬質である。埋没過程で周囲の状況が大きく変化しない状況で、継続的に土砂が流入して堆積した結果と考えられる。人中層にかけては地山土である明褐色土を粒状に含む黒褐色土が堆積していて、これらの層は貯蔵穴廃棄後漸移的な埋没過程で堆積したものと考えられる。土層の傾斜をみると東から西に傾斜していることが確認でき、東側から主に土砂が流入したと考えられる。6層は地山土の明褐色土の大ブロックであるが、これは天井もしくは壁面からの崩落土とみられる。

出土遺物（Fig.11）

遺構内から出土した遺物は総量でパンケース1箱にも満たず、また小片が多く、図示可能な遺物は少ない。

13は短頸壺の口縁部から胴部中位にかけての破片。胴部内面に横方向のハケ目が残るのが確認できるほかは、風化のため器壁が剥落し、調整が観察できる部分はない。遺構内に切り込んだ後世の遺構に含まれていた遺物の可能性もある。

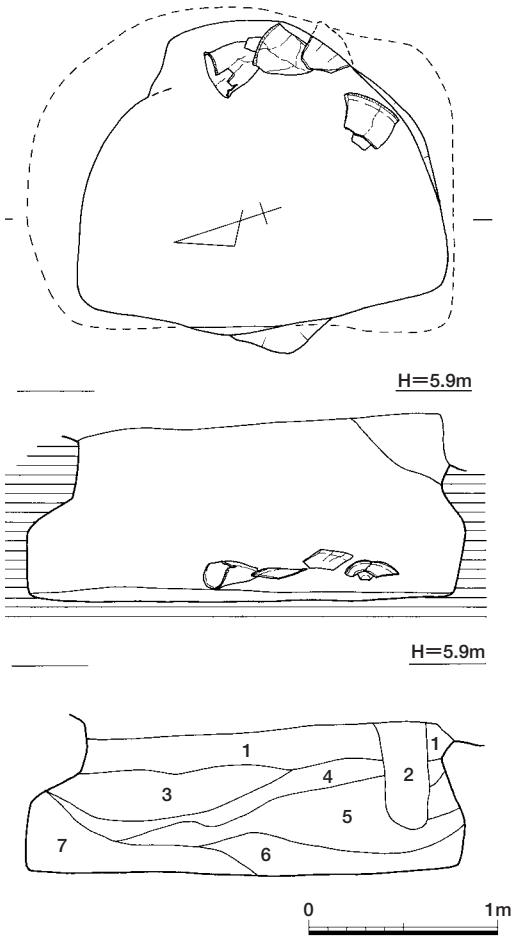


Fig.13　SK-08 遺構実測図（1/3）

1：黒褐色土　2：暗褐色土　3：明褐色土　4：黒褐色土　5：明褐色土　6：明褐色土　7：黒色土

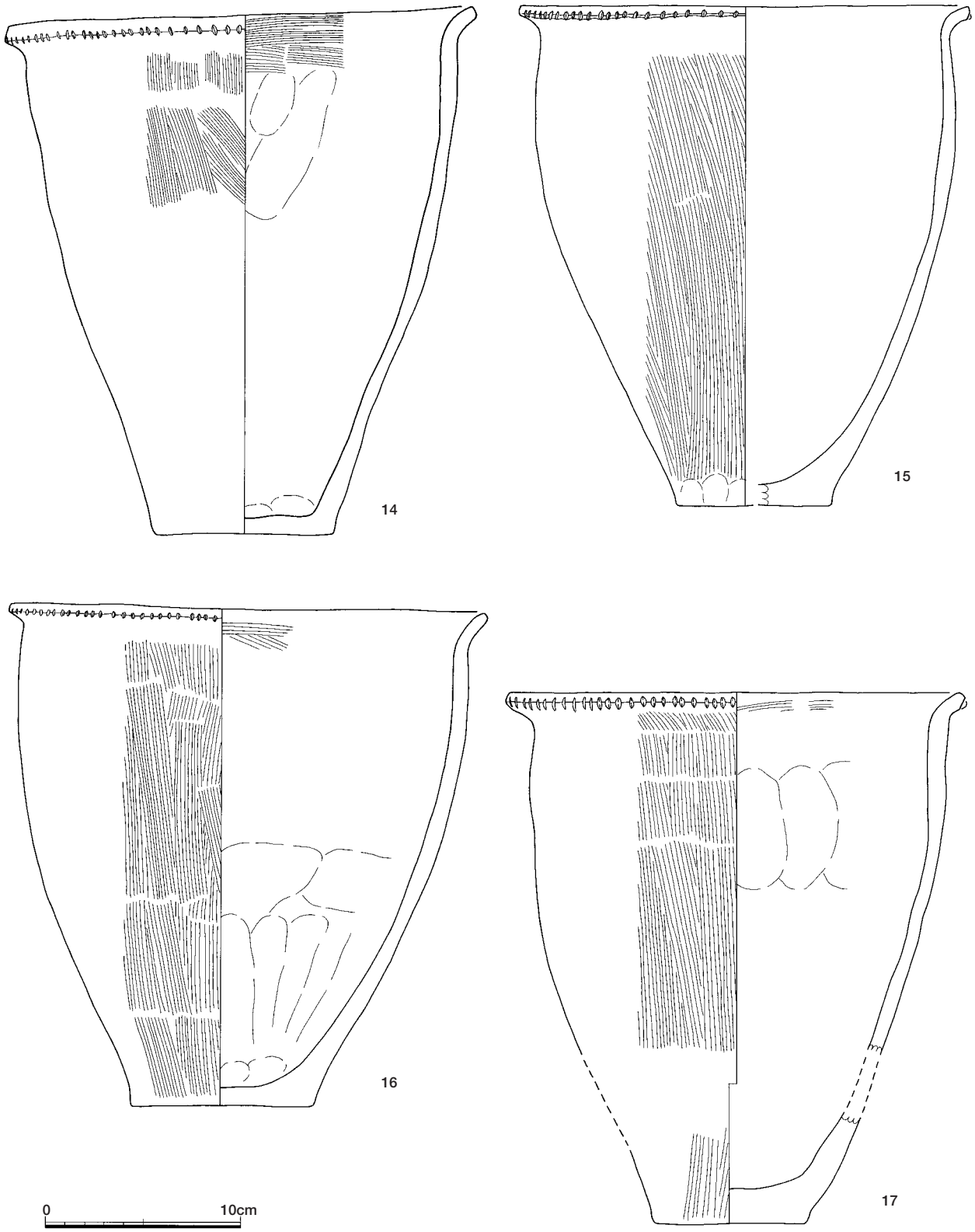


Fig.14　SK-08 出土遺物実測図1（1/3）

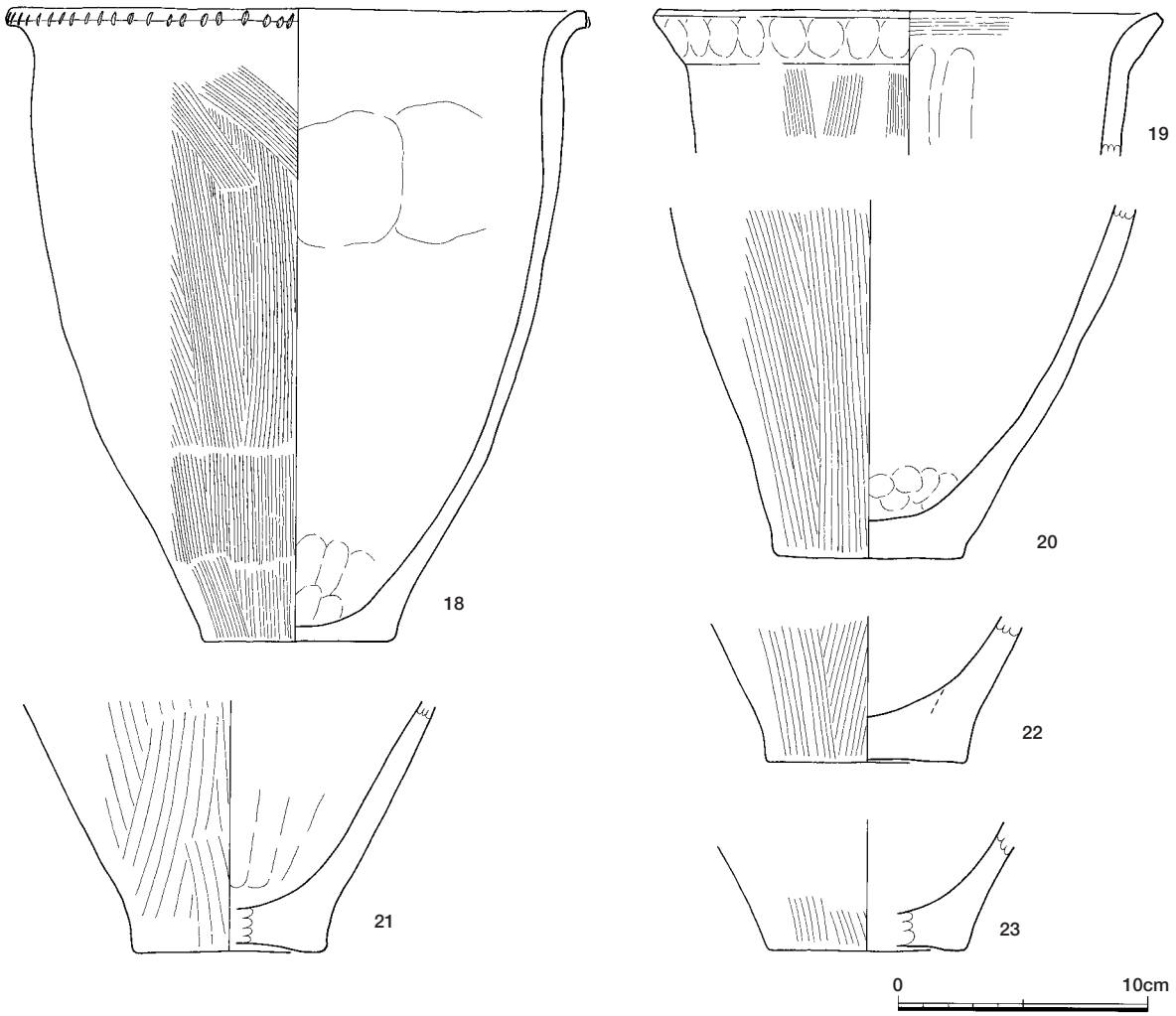


Fig.15　SK-08 出土遺物実測図 2 （1/3）

為的に土砂を投入して埋めたような土層の痕跡はみられない。

出土遺物

遺物量はきわめて少なく、パンケース1箱に満たない。出土遺物も小片が多く、図示可能な遺物もない。出土遺物は全て弥生土器の破片である。

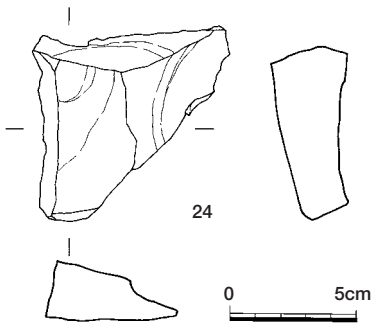


Fig.16　SK-08 出土遺物実測図 3 (1/3)

SK-08（Fig.13）

調査区東側部分で検出された土坑で、遺構軸線は北東から南西方向に向き、他の貯蔵穴とは若干軸線を異にしている。

遺構下端の形状は隅丸方形に近い形態で、北西隅角がかなり丸みを帯びて半円形に近い形になる。床面はほぼ平坦で床面と壁面の境界は明瞭に屈曲している。壁面は西側壁を除く壁面でオーバーハングしている状況が看取される。西側壁は床面から垂直に近い形で立ち上がっており、本来の壁面の形状も現況と大きく変わらないものと考えられる。東側壁は一部崩落によっ

て原型を留めていない。

遺構東側壁に沿って完形または完形に近い土器片が4個体分、横置した状況で出土している。これらは床面から10～20cmほど浮いた状況で出土しており、埋没時に投棄されたものと考えられ、東側壁に転落していることからみて、埋没時の流入土層の上面が東に傾斜していたことが想定される。

覆土は、黒色土と明褐色土が複雑に折り重なって堆積している。5・6層は明褐色土の大ブロックで、その厚さからみてかなり大規模な崩落の結果と考えられる。

堆積層の傾斜は大きくみて南から北へ傾斜しているが、この傾斜が5層崩落土上面の傾斜に制限を受けているためか、本来の土砂流入口が南に位置していたためか、ということについても検討を加える必要がある。

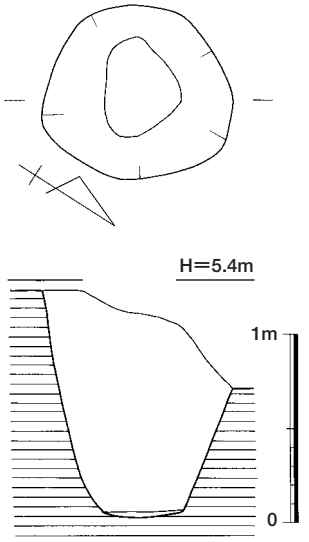


Fig.17　SE-09 遺構実測図(1/40)

出土遺物（Fig.14～16）

図示できた遺物のうち、土器は全て甕形土器である。出土した土器全体の中でも、壺形土器と見られる破片はほとんどない。

14は甕形土器で、遺構東側壁際から完形で出土している。口唇部は面取りして下端に小さい刻目を施す。外面上半は縦方向のハケ目が残存する。外面下半部は器壁の剥落のため、調整不明。内面は口縁部が横方向ハケ目、胴部上半には整形時の指圧痕が残る。胴部下半は外面と同様、剥落のため調整不明。底部は平底でナデ調整。胴部上部に帯状に煤痕跡が残る。**15**は甕形土器で、遺構東側壁際から完形で出土したうちの一個体である。口縁端部は横ナデ後下端に刻目を施す。胴部外面は縦方向ハケ目で、底部付近の外面には整形時の指圧痕が残る。底部は平底でナデ調整。内面はナデ調整。風化のため、内面の剥落が目立つ。**16**も遺構東側壁際から完形で出土した甕形土器のうちの一個体である。口縁は短く外反し、口唇部は面取りしていたと見られるが、風化で丸まる。外面は縦方向のハケ目で調整する。内面は口縁部が横方向のハケ目、胴部上半はナデ、下半は指押さえ整形。底部は平底で、細かい凹凸が目立つ。外面上部に黒斑が見られ、外面胴部中位に帯状に煤痕跡が残る。**17**は甕形土器で、完形に近い形で出土していた同一個体であるが、接合作業の際、胴部以上の破片と底部破片が接合できず、図上で復元する。口唇部は横ナデで面取りしていたと見られるが、現況では風化で丸まる。外面は縦方向のハケ目で調整しており、通常横ナデで仕上げる口縁部の屈曲部付近も縦方向のハケ目を施している。内面は口縁部が横方向ハケ目、胴部上位は指押さえ整形、下半部はナデ。底部は平底。胴部上位に帯状に煤痕跡が残る。胴部中位に黒斑がある。

18は破片が覆土内から散布した状態で出土しており、底部破片と胴部以上の破片とは直接接合しないが、図上で復元する。口縁端部には全体に刻目が施される。胴部は上部でやや丸みをもち、下部は直線的である。口縁屈曲部は横ナデ、胴部外面は縦方向のハケ目で調整する。内面は全体にナデ調整で、胴部上位には整形時のやや幅広の指圧痕が残る。**19**は甕型土器とみられる土器の口縁部付近。口径19.6cmで、同時期の甕形土器と比べてやや小型の甕である。口縁部は緩く外反し、全体にやや比厚して断面が三角形に近い形になる。口縁端部は軽く横方向にナデを行い面取りして整えているが、口縁部全体は指オサエによって整形しており、口縁部外面には指圧痕が並び、横ナデで調整を行っていない。胴部は直立し、外面は疎らに間隔を取った縦方向のハケ目を施す。内面は口縁部付近に横ハケの痕跡が残り、胴部には縦方向の指圧痕が残る。器形、整形、調整等さまざまな点で同時期の甕形土

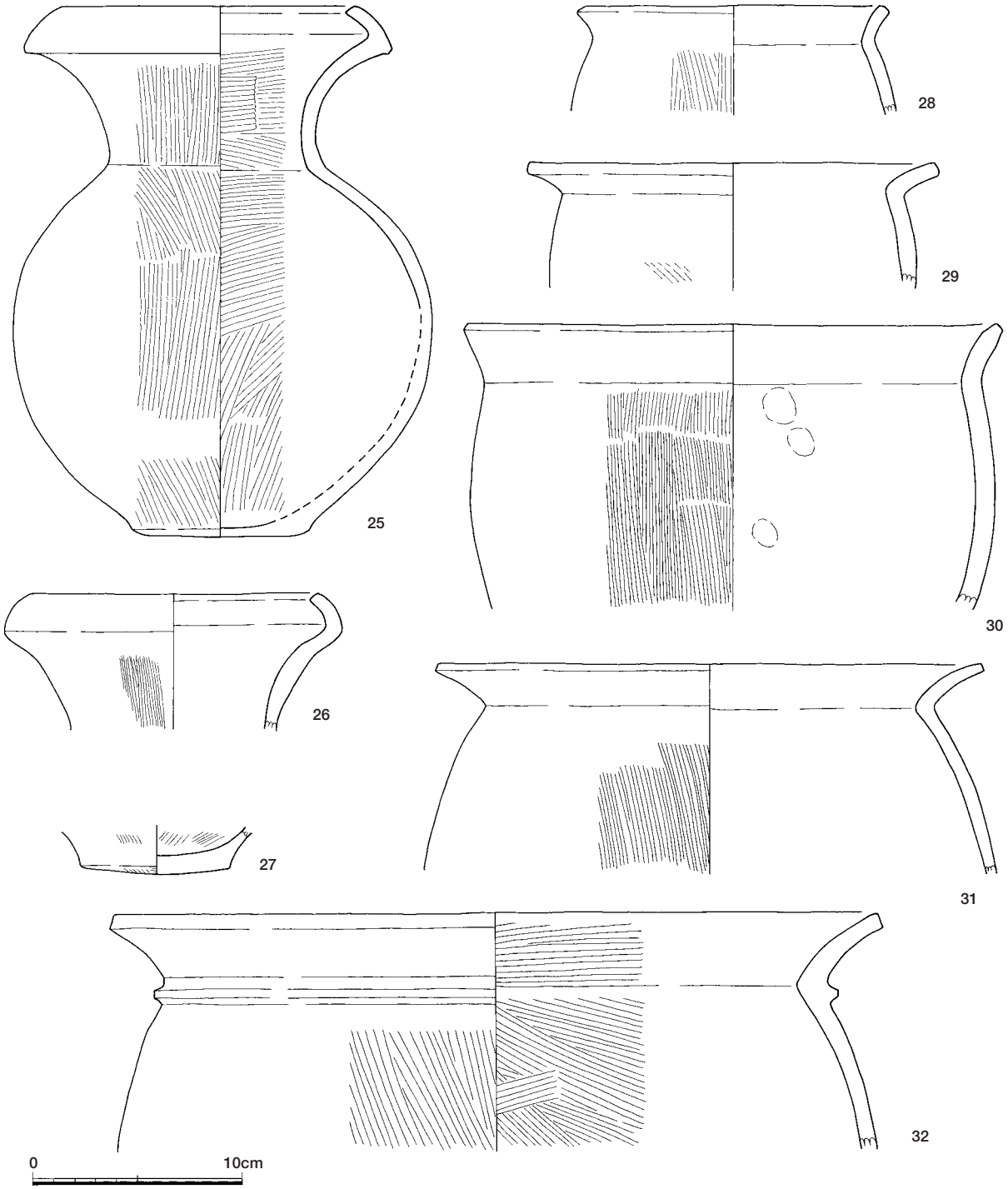


Fig.18　SE-09 出土遺物実測図1（1/3）

器とは異なり、朝鮮半島の無文土器に近い特徴をもつことから、無文土器の影響を強く受けて製作された土器と考えられる。**20**～**23**は甕形土器の底部付近の破片。20は胴部中位以下の破片で、胴部はやや丸みを持って底部に続く。底部は平底で、底部にわずかに歪みがみられる。胴部外面は縦方向のハケ目が施され、底部外面はナデ調整。内面は全面ナデ調整。**21**は胴部下位以下の破片。外面には目の粗いハケを施す。底部はやや上げ底を呈する。内面はナデで、整形時の指圧痕が縦方向に残る。**22**は底部付近の破片。底部はごくわずかに上げ底になっている。胴部外面は縦方向ハケ目、胴部内面は

ナデ調整。**23**は底部付近の破片。底径8.0cm。底部はわずかに上げ底を呈する。胴部外面は縦方向のハケ目痕跡が残る。内面はナデ調整と見られるが、内外面とも器壁の剥落が著しく、表面観察の詳細は不明である。

24は黒曜石の原石である。全面にわたって水和層が形成され、石器製作に伴う時期の剥離痕は見られない。弥生時代に母岩から割り出されたものではなく、当時自然界に礫として落ちていたものをそのまま拾ってこの地に持ってきたものと推定される。このような石材を使用して本調査区周辺で石器製作が行われていたと考えられる。各遺構から出土した剥片石器については章末にまとめて述べる。

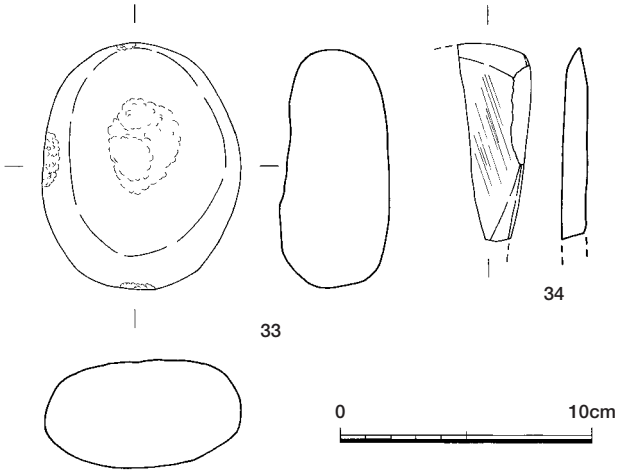


Fig.19　SE-09 出土遺物実測図 2（1/3）

2．井戸

SE-09（Fig.17）

調査区東側端部で検出された井戸で、当初は遺構の東半分が調査区外に及んでいたが、遺構部分のみ調査区を拡張し、井戸底面まで完掘した。遺構の北西側部分は撹乱で切られるが、遺構の全容はほぼつかむことができる。平面形態は円形に近い形で、井戸堀方はほぼ垂直に掘られており、床面は堀方中央に位置する。床面は楕円形に近い不整形で、ほぼ平坦である。井戸側面は床面から開き気味に立ち上がり、どの面もほぼ同じ角度をもって傾斜している。

遺構法量は検出面で径1.0mを計り、床面は長径0.6m、短径0.4mで、検出面から床面までの深さは1.2mを計る。井戸底面のレベルは標高約4.2mで、井戸としては若干高いと考えられるが、調査時点では井戸床面付近からわずかに湧水が見られ、雨天後には相当な貯水量が見られたので、当時は井戸として十分機能していたと考えられる。井戸底面直上で、完形の壺形土器が横置した状態で出土した。

遺構覆土は黒色粘土を主体とし、保湿度がかなり高い土質である。断面の観察では井戸枠等は確認できず、上層と下層の分層も難しい。また覆土から井戸に伴う構築材なども検出されておらず、素堀の井戸であったと考えられる。

出土遺物（Fig.18・19）

25は下大隈式に属する二重口縁をもつ壺形土器で、井戸底面で横置された状態で出土した完形品である。頸部は胴部から屈曲して外反して開き、口縁は屈曲して内側に内湾しながら立ち上がる。口縁端部は横ナデで面取りし、口縁内外面は横ナデで整えられる。頸部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目で調整する。胴部は球形で、底部は抹角状につくられ、丸底気味であるが、土器自体は自立する。胴部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目を施す。出土状況から見ると、井戸使用時のものか井戸廃棄時の祭祀に伴うものか特定できないが、いずれにしても井戸の時期を示すものであることは確実である。**26**は二重口縁壺の口縁部分。口縁端部は横ナデで面取りする。口縁の屈曲は緩く、やや丸みを帯びる。頸部外面には細かい縦方向ハケ目が残る。内面は口縁部付近が横ナデ、頸部はナデで調整する。表面の剥落が進み、丹塗りの痕跡は認められない。胎土も砂を多く含み、精製度が甘い。**27**は底部破片と考えられ、甕形土器の破片と考えられるが壺形土器の可能性もある。底径

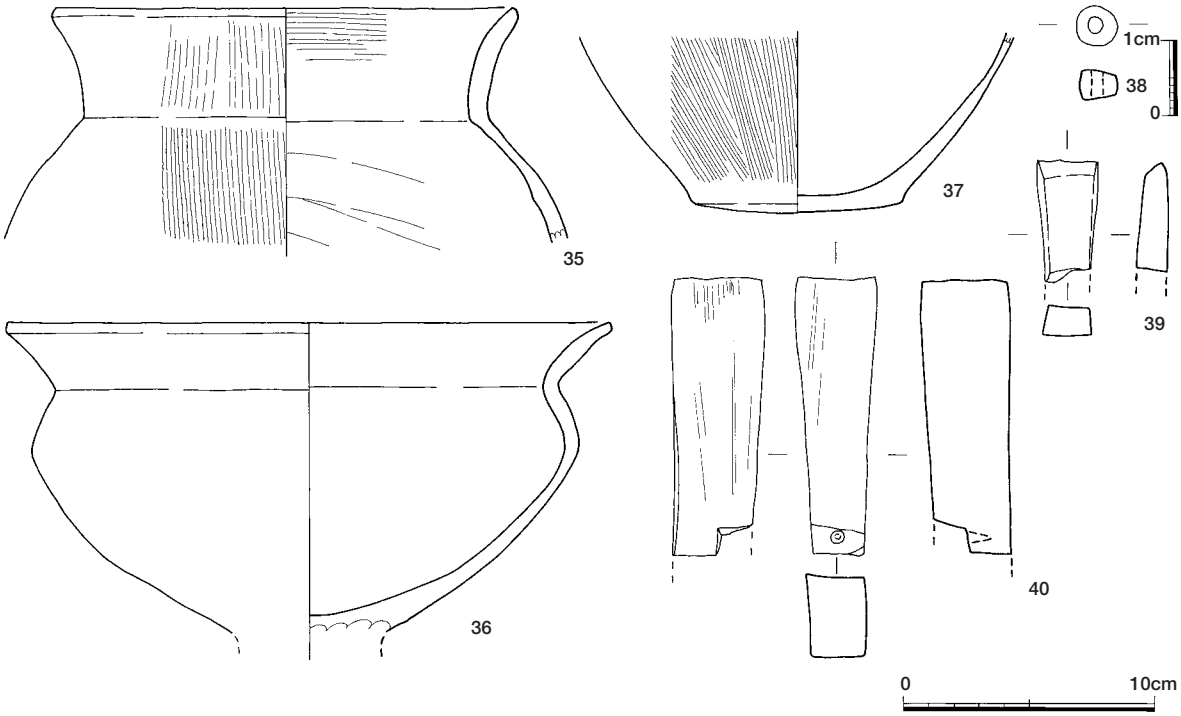


Fig.20　その他の遺構出土遺物実測図（1/3・1/1）

7.1cm。底部はやや丸底のレンズ状を呈し、底面にはハケ目を施す。胴部は縦方向のハケ目を施し、内面にもハケ目が残る。風化が進み、器壁の剥落が目立つ。**28**は甕形土器の胴部上位以上の破片。口径14.0cmとやや小型の甕である。口縁はく字形に屈曲して短く直線的に外反するが、屈曲度は強くない。口縁端部は横ナデで面取りする。胴部外面は縦方向のハケ目、内面はナデで仕上げられる。**29**は甕形土器の胴部上位以上の破片。口縁部はく字形に外反し、口縁端部は横ナデで面取りする。胴部外面にハケ目とみられる痕跡がかすかに残る。内面は全面ナデで、屈曲部の稜線は明瞭ではない。全体に風化が進み、特に外面の摩耗が著しい。**30**は甕形土器の胴部中位以上の破片。口縁は軽く外反し、口唇部は横ナデして面取りする。口縁外面は横ナデ、胴部外面は縦方向のハケ目調整。内面はナデ調整で、指圧痕が残る。

31は甕形土器の胴部上位以上の破片。口縁部は強く屈曲して湾曲しながら外側に突出する。口唇部は横ナデで面取りする。胴部外面には縦方向ハケ目をほどこす。内面は全体にナデ調整。内外面とも風化のため器壁の剥落が目立つ。**32**は比較的大型の甕形土器の胴部上位以上の破片。口縁部は屈曲して軽く湾曲しながら外側に長く張り出す。口唇部は横ナデで面取りする。口縁と胴部の境界に断面コ字形突帯が1条貼付される。口縁部外面～突帯部は横ナデ、胴部外面派は縦方向のハケ目で調整する。内面は口縁部が横方向のハケ目、胴部は左上方向ハケ目が施される。

33は敲石で斑岩系の石材を使用している。表面中央に叩打痕が1カ所、側面に3カ所認められる。**34**は板状の石製品で、コーナー部分のみ遺存していて、全体の形状は不明である。遺存部分の一端に刃部の加工が認められ、他の一辺は研磨されて面取りされる。粘板岩系の石材を使用して作られている。扁平片刃石斧のようなツールと考えられるが、石斧としては全体に薄手の作りをしているため、別の用途も考慮する必要がある。

３．その他の出土遺物（Fig.20・21）

35は土師器の短頸壺の胴部上位以上の破片。頸部は胴部から屈曲して立ち上がり、直立して軽く外反する。口縁端部の調整は甘く、端部も丸い。胴部は丸く張り出すと考えられ、口縁部に比べ器壁の厚さが薄く作られている。口縁部外面は縦方向のハケ目を施した後で横ナデを施す。胴部は縦方向のハケ目で調整する。内面は口縁部は横方向のハケ目を施した後で縦方向のナデを施し、胴部は左上方向のケズリを施す。焼成はやや軟質で胎土は明赤褐色を呈する。SP-105出土。**36**は台部分を欠損するが、台と鉢の接合部が遺存しており、台付鉢と特定できる。鉢部は胴部が扁平な球形を呈し、口縁部はく字形に屈曲して長く突出し、口縁端部は面取りしていたとみられる。風化がすすんでおり、内外面ともに器壁の剥落が著しく、調整がわかる部分はない。SP-102出土。**37**は甕の胴部下位以下の破片と考えられるが、壺形土器の可能性もある。底部はやや丸底気味のレンズ形で、底面にはハケ目を施す。胴部は丸く立ち上がり、球形もしくは倒卵形を呈すると考えられる。同外面は縦方向のハケ目を施し、内面はナデ調整を行う。SP-167出土。**38**は碧玉製の小玉。暗緑色を呈する。SP-101出土。**39**は砂岩製の石製品で、板状の四角柱形を呈する。遺存する端部は凸状に研磨されて刃状に研ぎ出されるが、刃部として使用したかどうかはっきりしない。石材が砂岩であることや各面が研磨されていることから考えて、砥石の可能性が高いとみられる。SP-222出土。**40**は粘板岩で作られた肌理の細かい砥石で、四角柱状の形状を呈する。端面は破断面のまま残されるが、その他の各側面は研磨面として使用され、縦方向の研磨条痕が残る。欠損部分が段状になり、穿孔の痕跡が見られるが、これが何の意図で穿孔されたものかは不明である。SP-139出土。**41**はSE-09出土の微細剥離がある剥片。石材は漆黒色不透明の黒曜石で表面の風化が著しい。佐世保市腰岳産出の黒曜石と推定される。長さ2.7cm、幅2.6cm、厚さ0.7cmを測る。打面は平坦でポジティブ面である。素材礫を分割した厚手剥片の打面側に近い位置にある。剥片背面には先行する３面の剥離があり、何れも平坦打面側からの剥離で、対抗方向からの剥離・調整は認められない。先端に自然面を取り込んでいる。側縁の一部に微細剥離が認められるが、先端部全体に及んでいたかは、剥片先端側の刃縁がガジリなどの新しい剥離で欠損しているために不明である。本剥片からは原石から剥出された厚さ約3cmの分割礫を素材とし、その主剥離面を平坦打面に転じ、打面側の端部から寸詰まりの剥片を連続剥離した工程が復元される。後期旧石器後半期以降に所属すると推定したい。

本調査では324点の剥片石器類が出土した。このうちサヌカイト製剥片が２点、他は全て黒曜石である。黒曜石の中でSE09から出土した１点は風化が著しく強く、剥離の特徴からも旧石器時代に所属すると推定された。それ以外の資料は風化度合いや剥離面構成などが共通し、本地域の弥生時代前期～中期に所属すると見られる。

弥生時代の剥片石器類は石器と二次調整剥片が合わせて８％、石核９％、剥片・砕片が83％ある。

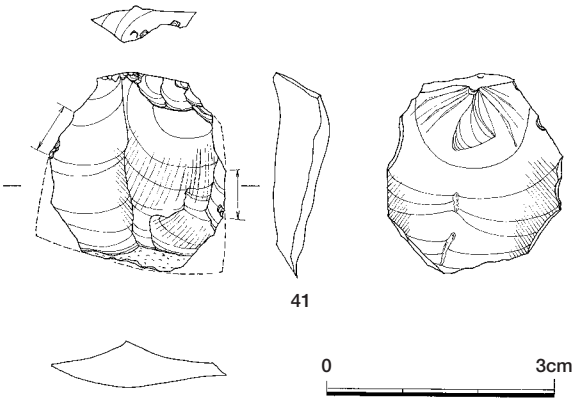


Fig.21　出土石器実測図（1/1）

Tab.1　比恵101次調査出土弥生時代剥片石器一覧

	SK-02	SK-03・04上層	SK-03	SK-04	SK-06	SK-07	SK-08	SE-09	合計
石器	0	0	0	1	0	1	0	1	3
二次調整剥片	7	3	3	5	2	0	2	1	23
石核	7	1	2	4	4	3	8	0	29
剥片	34	1	10	8	1	7	17	0	78
砕片	104	11	17	25	4	7	20	2	190
合計	152	16	32	43	11	18	47	4	323

第４章　小結

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代前期の貯蔵穴６基、弥生時代後期の井戸1基、ピット・柱穴群多数である。柱穴群については時期が特定できないものが多く、具体的な建物群の様相を述べることは難しい。以下では、弥生時代の状況を中心に調査の結果を振り返りたい。

弥生前期の遺構で検出できた遺構が貯蔵穴のみであることについては、現地の削平状況が著しいという理由で説明できる。削平の深さは、貯蔵穴が下部しか遺存していないことからみてかなりの深さであることが考えられる。当然、削平の際に竪穴住居などの浅い遺構については失われた可能性が高い。では、本来のこの地点における弥生前期の集落の様相はどのようなものであったのだろうか。

比恵遺跡群の弥生前期集落では、円形竪穴住居と貯蔵穴を主な要素として集落を構成している。比恵遺跡群第90次調査例を参考にすると、数次にわたり建て替えられた円形竪穴住居群と、竪穴住居分布域とは隣接するが重複しない形で貯蔵穴が配置されている。隣接する30次調査でも柱穴群と貯蔵穴の分布域は隣接するが重複しない。このように住居と貯蔵穴の占有範囲は明確に区分されていることがこの時期の集落構成のパターンとして見えてくる。

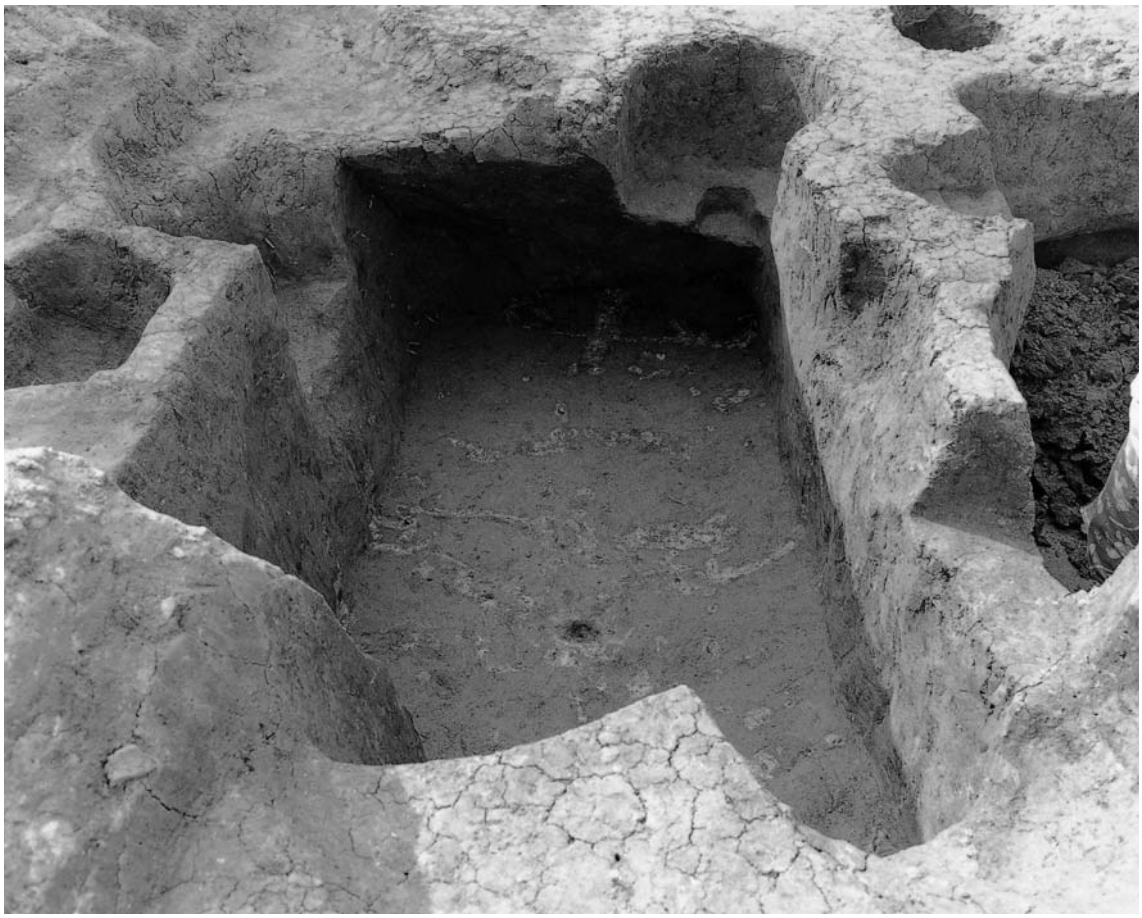
今回の101次調査の範囲内では、調査区の南側を中心として貯蔵穴が配置されている。従って、上記のパターンをそのまま当てはめるなら調査区の北側を中心とした範囲に竪穴住居が配置されていた可能性がある。もちろんこれはあくまで推定の域を超えることはないが、しかし3次・8次調査を含め今回の調査範囲周辺で竪穴住居の検出例がないことが即居住範囲の外であるということは言えないだろう。むしろ台地北側端部と同様に、本調査地点周辺にもある程度の規模の弥生前期集落の1つがあったと考えるべきである。

1　調査区西半全景（南東から）

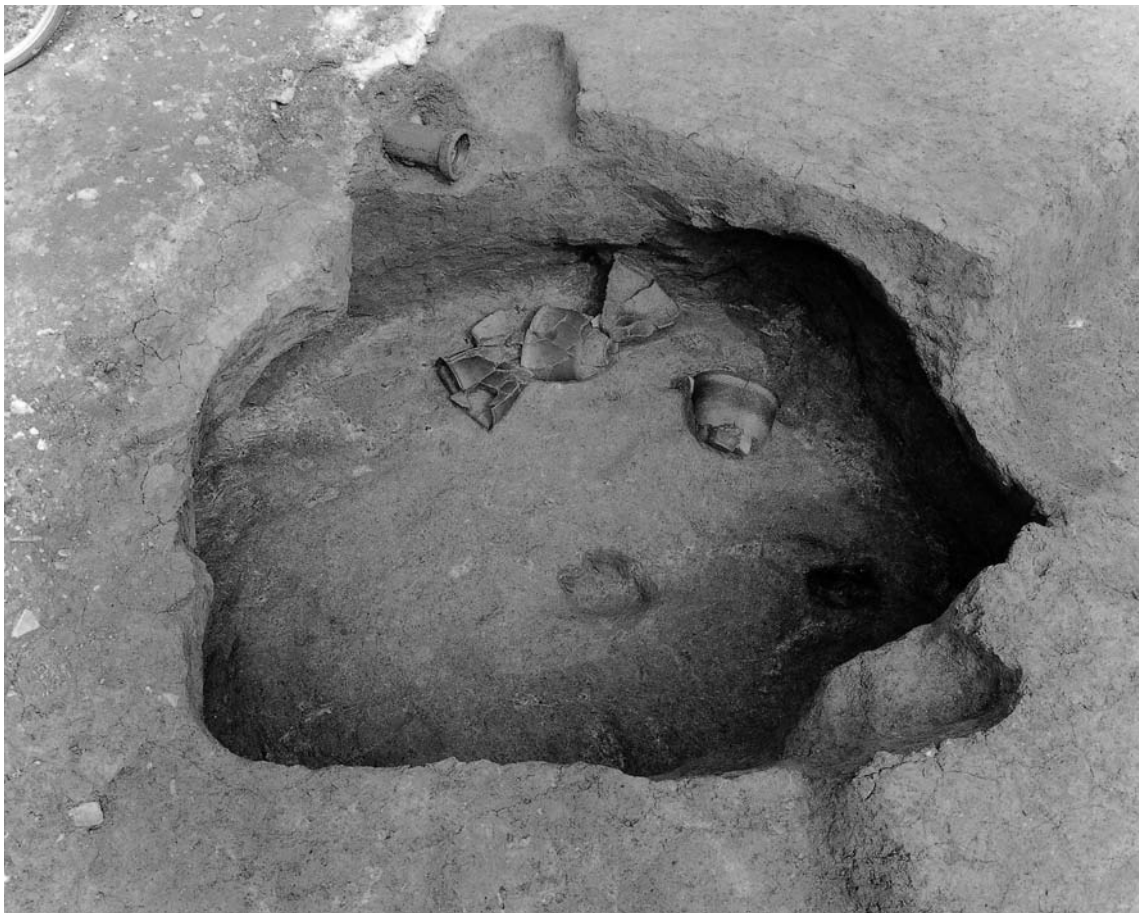
2　調査区東半全景（北西から）

図版 2

1　SK-03（東から）



2　SK-04（南から）



1　SK-08（北から）

2　SE-09（南東から）

図版 4

3

4

5

14

16

25

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ひえ48
書　　名	比恵48
副 書 名	比恵遺跡群第101次調査報告
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第957集
編 著 者 名	大塚紀宜
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	810-8621　福岡県福岡市中央区天神1丁目8-1
発 行 年 月 日	平成19年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
比恵遺跡群（ひえいせきぐん）	福岡市博多区博多駅南5丁目107他（ふくおかしはかたくはかたえきみなみ）	40132	020127	33°34'40"	130°25'31"	2005.6.14 ～2005.7.16	119.9m²

調査原因	遺跡種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
共同住宅建築	集落	弥生時代	土坑（貯蔵穴）6基、井戸1基、ピット・柱穴群	弥生土器・石器	

要　約

比恵遺跡群の西側端部に位置する。那津官家推定地の西側に隣接する地点である。現況は宅地で、周囲よりも1m程高くなっている。地元の古老によると、旧況は小高い丘状の地形で、現在より2m以上高かったらしい。現在の標高は6m前後である。

現地は宅地造成の際に激しく削平されており、現在の地表面上で明赤褐色ローム層が露出して、この面で遺構を検出する。検出された遺構は弥生時代前期後半の貯蔵穴、弥生時代後期の井戸、弥生～古墳時代の柱穴群である。貯蔵穴は合計6基検出されている。貯蔵穴のうち3基は断面形がフラスコ形を呈する。また残り3基は全体に整った箱形を呈し、床面の四隅は明瞭で全体にシャープな形態をとる。井戸は1基検出され、直径1m、検出面からの深さは1.2mで、本来の地表面からかなり削平されていると考えられる。

遺物は床面直上や覆土上層の流入土中から弥生時代前期後半の甕形土器が略完形で出土するものがあるが、全般に遺物量は少ない。井戸底面から高三潴式の甕形土器が完形で出土する。

周辺の旧地形と、貯蔵穴の立地状態からみて、弥生時代前期には一帯に集落が存在していた可能性が高く、その後削平により、竪穴住居が失われ、貯蔵穴のみ遺存している状況であると推定される。隣接する那津官家に関する遺構・遺物はほとんどみられないが、これも削平の結果と考えるべきであろう。

比恵48

2007年（平成19年）3月30日

発　行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　文化印刷株式会社
福岡県北九州市小倉北区井堀３丁目18-16